高体連登山部を通しての普及活動

2022／6／4

日本学連幹事会での説明資料

JOA業務執行理事　村越真

登山とオリエンテーリング：背景

- オリエンテーリング黎明期（1960年代～）
  - 読図習得のために多くの登山者が参加。その後のオリエンテーリングを支えた人材も。
  - 登山競技（国体）が正式競技での踏査（2002年に廃止）
- 各地で個人的、個別的な関係
  - 登山競技からもオリエンティアを排出（田中正人、宮内佐季子、番場洋子、渡辺（小暮）円香、紺野俊介等）
  - 村越他が、国立登山研修所で読図講師を継続

高校登山との関係：背景②

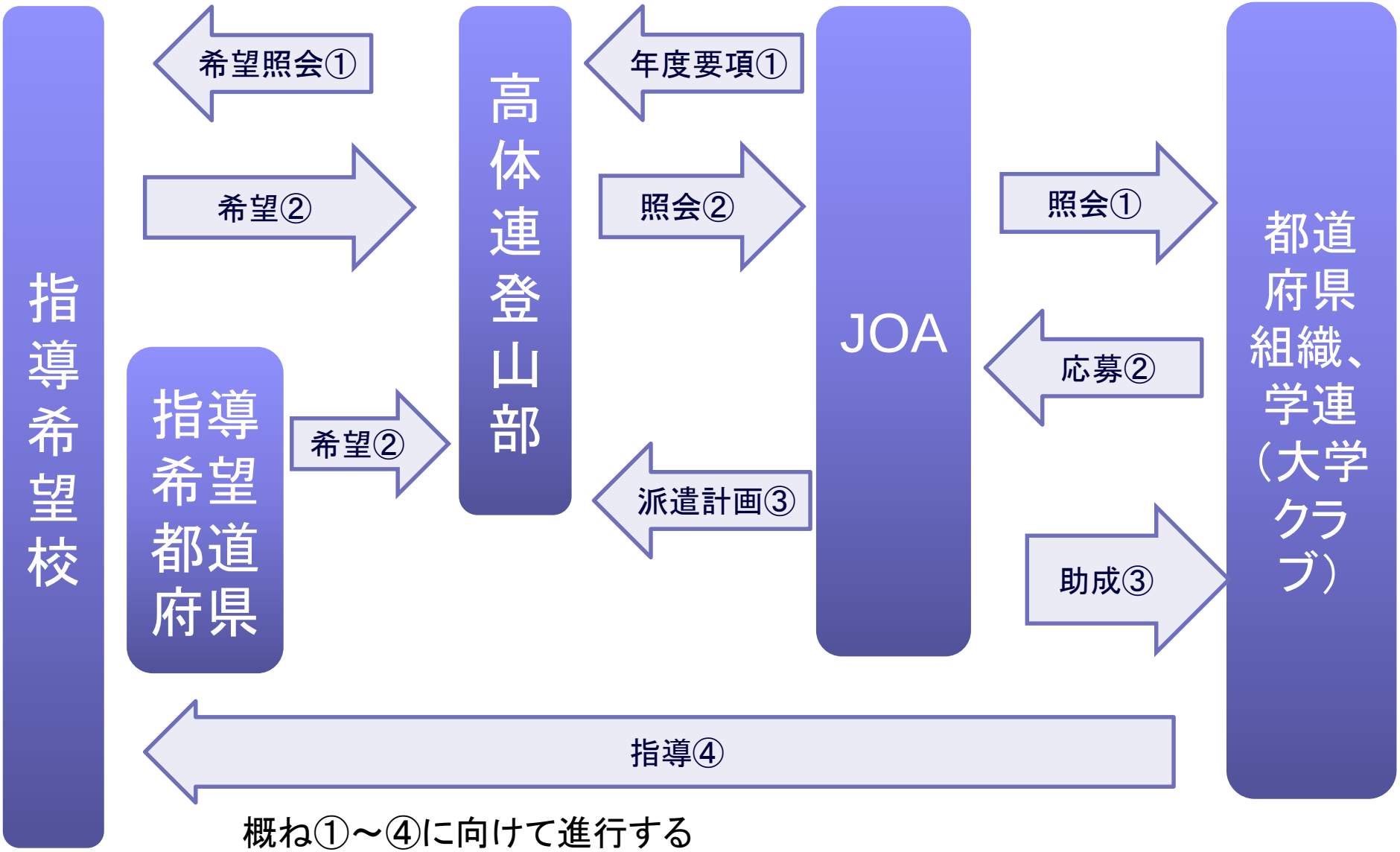
- インターハイ種目における読図
  - インターハイでも踏査競技として実施中。100点満点中5点（10問程度）
- 各地で個人的、個別的な関係
  - 滋賀県、青森県、新潟県、等
- 強豪校（インターハイ出場等）はオリエンテーリング実施大学と相性がよい
  - 2021年男子出場校：釧路湖陵(北海道)　○八戸工大一(青森)　○盛岡工(岩手)　○古川(宮城)　○横手(秋田)　○村山産(山形)　○山形南(山形)　○郡山北工(福島)　○水戸一(茨城)　○前橋(群馬)　○松山(埼玉)　○千葉東(千葉)　○早実(東京)　○横浜修悠館(神奈川)　○北杜(山梨)　○新発田南(新潟)　○松本県ケ丘(長野)　○富山工(富山)　○金沢泉丘(石川)　○武生(福井)　○藤枝東(静岡)　○岡崎(愛知)　○神戸(三重)　○飛騨神岡(岐阜)　○膳所(滋賀)　○桃山(京都)　○常翔啓光学園(大阪)　○神戸(兵庫)　○郡山(奈良)　○田辺(和歌山)　○境港総合技術(鳥取)　○松江北(島根)　○岡山工(岡山)　○修道(広島)　○防府(山口)　○丸亀(香川)　○城ノ内(徳島)　○松山南(愛媛)　○土佐(高知)　○福岡(福岡)　○鳥栖工(佐賀)　○長崎北陽台(長崎)　○熊本(熊本)　○別府鶴見丘(大分)　○宮崎大宮(宮崎)　○加治木(鹿児島)

インターハイ登山の様子（2012年新潟大会）

メリット・課題

- メリット
  - オリエンテーリング
    - オリエンテーリングを高校生に知ってもらうチャンス
    - 大学進学時等での選択肢
    - 社会貢献による社会的知名度向上
    - 部員のスキルアップやモティベーション。
  - （高体連）登山の安全とインターハイに必要な読図・ナヴィゲーションの能力を、実践的に学べる大学生・地域の社会人との交流が生まれることでスポーツを生涯にわたり楽しむ資質育成にもつながる。
- 課題
  - 地域的偏り→オンラインでの対応
  - 費用負担

高体連登山部との協力スキーム案



概ね①～④に向けて進行する

現状

- 2021年、高体連向けオンライン講習（全15回、計23校、約300人が参加）
- 全国高体連とは連携を大枠承認
- JOAのナヴィゲーションインストラクターに高体連登山部代表者参加
- 2022年8月に神奈川県高体連で指導
- 2022年8月インターハイ監督会議にて広報

ロスジェネインカレ報告書

2022 年 6 月 4 日

日本学生オリエンテーリング連盟理事
谷野　文史

1. 開催の背景

日本学生オリエンテーリング連盟では、新型コロナウイルス感染拡大の影響により 2019 年度春インカレ(開催地:栃木県)および 2020 年度春インカレ(開催地:三重県)が中止となり、インカレの歴史の中で 2 年間の空白が生まれてしまいました。このため、空白期間に一生懸命競技に取り組んできた学生(主に 2016 年度入学・2017 年度入学)は、その思いを晴らすことができないまま学生生活を終えてしまいました。そうした選手の努力や思いを晴らす場を提供すべく、日本学生オリエンテーリング連盟として公式の競技の場を設け、選手を表彰するイベントを開催することを提案いたします。

また、本イベントでは次世代の学生オリエンテーリング界の発展への貢献も目標といたします。イベント利益の一部及び、大会当日に参加者からの募金を日本学生オリエンテーリング連盟に寄付することで、次世代の学生たちが充実した競技生活を送ることができる環境を整えることにつなげます。

2. 開催概要(実績)

主　催	日本学生オリエンテーリング連盟
主　管	ロスジェネインカレ実行委員会
開催日	2022 年 4 月 30 日(土)
開催地	栃木県矢板市
競　技	ミドル・ディスタンス競技 / タイムの合算による団体競技
テレイン	矢板塩田
参加者数	選手権対象者　184 名 一般クラス対象者　124 名 計　308 名

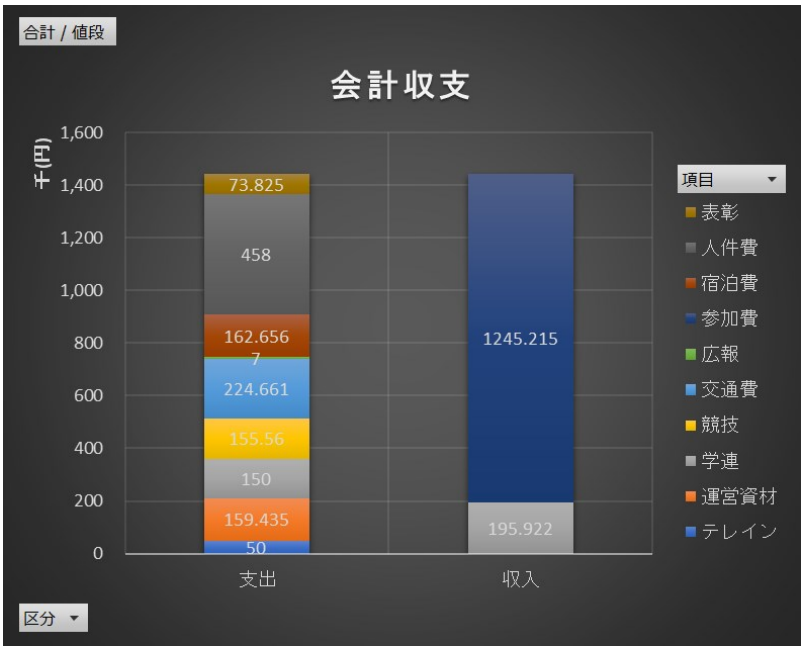
3. 成績

Lapcenter をご参照ください。
<https://mulka2.com/lapcenter/lapcombat2/result-list.jsp?event=6959&file=2&class=0>

4. 会計

収支としては黒字を達成しており、以下のとおり合計 **658,000 円**を日本学連に還元するとこができました。

・テレイン修繕費(矢板塩田) **50,000 円**
・人件費(運営学生支援金)　**458,000 円**
・学連寄付金　**150,000 円**



※詳細につきましては、別紙をご確認ください。

5. 開催による効果

① ロスジェネ世代の活躍・表彰の場の提供

- 184 名ものロスジェネ世代を集めることができた。
- レースを通じてロスジェネ世代の選手が活躍・応援をされる場を提供することができた。
- ロスジェネ世代の選手の名誉を称える表彰を行うことができた。
- 参加者の中には 2 年ぶりに競技に取り組んだという選手もおり、OB・OG と学連を結び付けるイベントとなった。

② 学生への資金援助

- 本イベントに携わった現役学生に活動支援費を支払うことができた。(ave.9,000 円)
- 本イベントの利益により、日本学連のテレインである「矢板塩田」を修正することができた。
- 日本学連に対し、15 万円もの金額を寄付することができた。

③ 学生間の"つながり"の醸成

- 運営を通じて、様々な大学の学生を結び付けることができた。

令和４年６月３日

日本学生オリエンテーリング連盟
技術委員会様

東北大学学友会オリエンテーリング部

北東学連の来年度インカレミドル男子選手権クラス枠配分について

先日発表されました2022年度のインカレミドル枠配分に関する議事録の内容につきまして、東北大学オリエンテーリング部としては受け入れがたいものであります。東北大学オリエンテーリング部としては、全体として前年度から枠数を変動させない措置(議事録の３番に相当する措置)を検討していただきたいと考えております。以下に理由、議事録に記録されている意見への反対意見を述べさせていただきます。

・欠員数の割合が他学連に比べて大幅に大きい点
まず、男子選手権クラスでは北東学連に割り当てられていた枠数10枠のうち、7割にあたる 7 人の欠員が出ていることが挙げられます。議事録にも記録されているように、割合にして北東学連は他学連を大きく上回る欠員を出しています。7人という人数にのみ目を向ければ同程度の欠員を出している学連は他にも見受けられますが、北東学連ではミドルセレクションにエントリーしている大学の数自体が他学連より少なく、3校のみの出場となっていました。そのため、北東学連で最多の出場者を出していた当大学のインカレミドル不参加を受けて、北東学連ではセレクションのボーダー順位を大きく下回る選手をインカレミドル選手権クラスの出走者として繰り上げざるを得ない状況でした(出走者 69 名のうち最大で46位まで繰り上げ)。この時点で、北東学連に著しい不公平が生じていることがわかるかと思います。

・北東学連への救済措置を行った場合の他学連への影響
仮に東北大学含む北東学連への救済措置を行った場合に、他地区学連の大学から批判が起こるようなことがあるのかについても疑問を感じております。東北大学の不参加が確定したのはインカレ開催日の直前でしたが、各種SNSでの情報、不参加の大学が出たことを受けてスタートリストに一時的に空欄ができていたことなどから、北東学連からの欠員が非常に多いことを知った他学連の学生も少なくないと考えられます。そうした状況で北東学連に救済措置を行うことが、一様に他学連、他大学からの批判を招くとは言い切れないのではないかと考えております。

・エントリー人数、学連登録者数の枠配分への影響について
2021年の関東学連以外のミドルセレクションの出走者数を見ると、東海学連は77名、関西

学連は 68 名、北信越学連は 16 名であるのに対し、北東学連は 69 名が出走しています。学連の加盟登録者数について具体的な数字は定かではありませんが、関東についで関西が多く、東海と北東が同じような人数、その次に北信越、中九四の順に多かったと記憶しています。

選手権クラスの枠配分は前年度の実績に加え、各地区学連の加盟員数、セレクションクラス出走者の数も少なからず影響があり、それによって妥当な枠配分が決まるものであると思っておりますが、北東学連の 5 枠は他地区学連の加盟員数、セレクションクラスエントリー人数と比較しても少なすぎるのではないかと思います。前年度東北大学が出場できなかったことにより、むしろ枠配分数が多すぎる地区学連もあるかと思いますので、そういった意味でも枠の再分配を検討していただきたいです。

・救済措置を行うことで前例を作るべきではないという意見に対しての反論
後から枠配分の規則に特例で変更を加えるような前例を作るべきではないという意見もありましたが、こちらについても反対意見がございます。2020 年度のインカレスプリントの結果は不参加の大学が複数あった状況でありながら次年度の枠配分には用いられませんでした。2021 年度のインカレスプリントでは 2020 年度の結果の代わりに 2019 年度の結果を参照して枠配分を決定し、今回公開された議事録の中の案では 3 番(全体昨年度を採用)に相当する対応がとられていました。そのような前例があるにもかかわらず、今回は欠員の大幅に出た学連に負担を強要しているという状況に一貫性がないのではないかと考えております。2020 年度のインカレスプリントは予選決勝方式という特殊な形式であったこともあり、前年度の結果を採用したことは耳にしていますが、複数の大学が不参加であった点を踏まえると、全体で昨年度の枠数を採用するという措置をとることは必ずしも不可能とは言えないのではないかと思います。

・北信越学連に対して不公平であるという意見への反論
2020 年度のロングで北信越学連に不参加の大学あったことも踏まえて、今回北東学連に特例で救済措置をとることは不公平ではないかという意見に関しても反対意見がございます。2020 年度の北信越学連に与えられた枠数は 2 枠であり、10 枠のうち 7 枠分繰り上げざるを得なかった今回の北東学連と比較すること自体が公平性に欠けるのではないか思います。

以上の理由から、全体で昨年度の枠配分から枠数を変動させない措置を検討していただきたいです。

枠配分について議論がなされた幹事会からは数か月ほど経ち、他大学や他地区学連には枠配分についての議論は終わったものと捉える方もおられるかもしれません。しかし、3 年間の間中止されてきたインカレミドルリレーが開催されるという矢先に出場がかなわず、

北東学連の枠数も大幅に減ってしまうという状況は、10 枠から 5 枠に枠数が半減したという実際の数字以上に当大学、北東学連にとって損害が大きく、到底納得できるものではありません。大幅に減らされた枠配分数をもとに戻すには長い時間がかかると予想されます。改めまして、東北大学オリエンテーリング部としては、公開された議事録では 3 番に相当する措置(全体で昨年度の枠配分を採用)を検討していただきたいです。